

『受け継がれる住文化-和の住まい・和の住生活』

2015年10月9日(金) 見学会11:00~12:00/講演会13:30~17:10  
 和敬塾本館(東京都文京区)  
 見学会講師・趣旨説明: 内田青蔵(神奈川大学 教授/住総研研究運営委員会 委員長)  
 講師: 竹原義二(無有建築工房 主宰)  
 木村忠紀(株式会社木村工務店 代表)  
 梅本(切原)舞子(千葉大学大学院 特別研究員)  
 碓田智子(大阪教育大学教育学部 教授)  
 コーディネーター: 松本暢子(大妻女子大学社会情報学部 教授)



内田青蔵氏



竹原義二氏



木村忠紀氏

本年度の住総研シンポジウムは、「受け継がれる住まい」をテーマとしている。3回のシンポジウムで、私たちの住環境や地域社会をどう継承していくべきかを議論し、「受け継ぐこと」を当たり前のこととして導く社会を目指す。10月9日に行った第2回目のシンポジウムは、和敬塾本館(旧細川公爵邸)にて開催。生活を含めた住文化に焦点を当て、日本の伝統的な住まいの魅力に迫った。

本年度のテーマ発案者である内田青蔵氏は、「現代の日本の住宅において、和室は消失しつつある。それは単に物理的な減少だけではなく、和室にともなう和の文化の消失である」と警鐘を鳴らす。内田氏の基調講演では、戦前の日本住宅における和と洋のあり様を時系列に捉え、和洋融合の歴史を解説した。中でも当時の建築家たちによる和洋折衷の創意工夫は、日本の気候風土の中で生まれた伝統を大事に継承しつつ、和と洋の境界線を消し去った新しい試みであるとして注目した。日本の住文化再考にあたっては、変わらずに継承すべきものと、変化しながら継承していくものを改めて捉え直す必要があると述べた。

●竹原義二「和の住文化の継承とその実験」

竹原氏は「今、自分の住まいについて、胸をはって誇れると言える人はどれ位いるだろうか?」と、会場に問いかけた。例えば、人を招き入れる時のしつらえは、料亭に限らず、一般的な家にも必要だと話す。石に水を打って人を迎えるという古くからの習わしには、石の材種や敷き方、目地、何れも欠かせない要素となる。また、人を迎え入れる玄関とはどういうものか、その扉はどうあるべきか、上がり框や、視線の先にある壁の仕上げ等、その全てが人を迎える所作に関わってくるという。それゆえ、素材は経年変化によっ

て素材の良さが増す様なものを選び、職人の手間を惜しまないこと。人を招き入れる時、お茶を差し出す時、自分の子どもと話をする時、折々に「和のものさし」を用いて対話のできる住まいは、自然と住み継がれていくのではないかと話した。

●木村忠紀「大工職から見た技術の継承」

約50年間大工職に携わる木村氏は、和の継承を「技術」という角度から話した。木村氏によると、日本の木構造は鎌倉時代以降に大きく発展したという。それは貫のめり込みによって軸組を持たず構法で、それが日本で培った伝統的な構法といえる。しかし近代以降、筋交や面材によるブレス構造と大きく二つの道に分かれ、昭和25(1950)年の建築基準法制定の際は、貫による構法は耐震要素が評価されず完全に否定されてしまった。また職人の技術も、明治中期をピークにどんどん下がってきていると指摘。その要因の一つは、道具から工具への変化だ。使う職人の手に合わせて使う人間が作り上げる道具は工具へと変わり、技の質をどんどん落としているという。二つめは施主の意識。家は作る時代から買う時代へと変化し、部位ごとにパーツ化されたキットのようなものへと変化した。しかし、工業化された製品を組み立てるだけの仕事では、大工は技を継承できない。若い大工が本当にやりたいと思う「ほんまもの仕事」を生むことで、技は自然と継承されると会場に訴えた。

●梅本舞子「床上文化と和の継承」

梅本氏は、和室の設けられ方とその使い方調査を通して、これからの和の住まいの有り様を見据えた。具体的な調査対象は、サラリーマンで、新たな地に開発された郊外の一戸建て住宅地に住む地縁血縁が薄い

遊動層。つまり、最も和の要素を継承しにくい人たちの生活に、和の要素の変化をみていく。先ず明らかな変化は、和室の激減である。2000年前後、和室がない住まいは1/4程度あり、1980年代には85%の家にあった床の間は、現在15%にまで減少。また、かつては玄関脇の応接間が唯一の洋室であったのに対し、今は玄関脇の一室のみが和室で、ここが接客のハレの空間として意識されているという。現代の住まいは、第三者との関わりが希薄で接客空間としての存在基盤が薄まった。この変化に伴い中廊下型から居間中心型へと住まいは変化し、家族の空間であるリビングと和室が連続するタイプが急増している。しかし、こうした変化の一方で、和室へのニーズは依然として高いという。和室を持たない層でも、「やはり和室は欲しかった」、「床の間を設けたかった」とする回答はあり、和室の様々な用途に対応できる融通性の高さに評価が集まっているとした。

#### ●碓田智子「伝統建築文化と住教育」

かつては家にあった当たり前のものが、今は学校の教科書の中で学習し知識として身につけるものになってきた。現行の学習指導要領の中には「伝統や住まいに関する教育の充実」との柱があり、学校の教科書で、住まいや住文化を学ぶ機会は増えた。しかし碓田氏の調査では、大学生でも和室の基本要素（床の間、敷居、鴨居など）が何なのかさえも分からなくなってきているという。住文化の理解度は、和室の有無や、祖父母との接触の度合いが大きく影響する。しかし今、そうした条件が整う家庭は多くはない。和の住まいや生活は、自然と伝承されていくものではなく、何らかの働きかけが必要になると話す。そこで碓田氏は、重要文化財の民家「伊佐家住宅」で住生活についての聞き取り調査や、地域の人に伊佐家住宅を知ってもらおうようなミニ講座等のイベントを開催している。こうした活動を通じて和の生活を知ってもらい、地域の理解と共に重要文化財の維持管理を進めていくのだ。また最後に、今暮らしている洋風の住まいもまた、連綿と続く歴史や文化の上にあることを子どもたちに理解してもらおう必要があると話した。

#### ●ディスカッション

ディスカッションでは、「本当の和とは何か」という投げかけから、何が「和か」ではなく、「何を受け継ぐのか」を掘り下げる必要があるとして議論が進んだ。その中で竹原氏は、「なかなか受け継ぐことができないのは、住んでいる家があまりにも貧しすぎるから。その中で住文化の継承といっても空振りするだけ」と、先ずは今の住まいを見直すことだと喚起した。また会場の祐成氏は、若い時に無理をして長期ローンを組んで買う住宅が、消耗品ではない住宅のあり方と、持ち家との相性があまり良くないのではないかと、借家システムの見直しを提案。継承を考えるにあたっては、まず現代の働き方や暮らし方こそ見直しの必要があると祐成氏は続けた。

また継承にあたっては、「文化というのはキャッチボール。住むという文化に対するキャッチボールができていないから、その文化は停滞している。和か洋かという話を越えて、人間が住むということが一体どういうものであるのかを掘り下げてキャッチボールしなければ」（木村）、「空間のみならず日本人らしさとは何か。言葉以外の非言語のコミュニケーションを大切にするというのが日本人らしさであり、引き継ぐものではないか」（梅本）、「和の住まいや住文化は家庭生活の中では受け継ぐことが難しくなっている。一時的なものではなく、継続的な機会を設けて日本人の文化力を底上げしなければ和の文化は残っていないのではないか」（碓田）と、登壇者のそれぞれの想いの中にコミュニケーションの重要性が表れた。

最後に内田氏は、「日本は独自のモデルを作る時代がようやく来た。和の文化、和の住まいをもう一度きっちり評価し、そういうものの中からものづくりができる時代へ、今こそ議論をしていく時期である」と、住文化継承における継続的な議論の必要性をあらためた。司会の松本氏は「住まいというのは、自分の生活を映し出し、具現化した存在である」と、住まいに対する教育の機会や底上げしていくための仕組みの重要性を再確認をした。その中で、本物の家を継承し、それを維持していくことの中から「ほんまもの仕事」を継承していきたいと、今回の議論を纏めた。



梅本舞子氏



碓田智子氏



松本暢子氏